

市史だより

Gači-majaa

第11号・2007年1月31日(水)発行

年3回 (5・9・1月発行)

編集・宜野湾市教育委員会文化課 市史編集係
〒901-2710 宜野湾市野嵩1-1-2

問い合わせ・情報提供先

☎ ? (? ☎ ? ☎

☎ (098) 893-4431

Fax (098) 893-4434

Kyoiku08@city.ginowan.okinawa.jp

祝トウシビー



合同生年祝いででの記念撮影 字宜野湾にて 1959(昭和34)年

『ぎのわん 字宜野湾郷友会誌』より

2月は旧暦1月にあたります。旧暦1月といえば、大きな行事である旧正月の他に、トウシビーと呼び親しまれている生年祝いも行われます。生年祝いとは、自分の干支を迎えた年の旧暦1月に当人の健康と幸福を祈願する行事で、13・25・37・49・61・73・85・97歳を祝います。なかでも、97歳のお祝いをカジマヤーと呼び、盛大に祝います。

トウシビーの家庭では多くのご馳走を準備し、親戚や招待客もご祝儀を用意するなど、経済的に負担となることから、戦後からトウシビーの該当者一同を公民館などに集めて祝う合同生年祝いが行われるようになりました。琉球政府の推し進めた新生活運動により、全琉に各行事や冠婚葬祭の見直しと簡素化が呼びかけられた頃であり、字宜野湾では家庭を支える婦人会からの要望によって合同祝いがとり行われ、各字でも簡素化された合同祝いが実施されました。

現在、字宜野湾では80歳以上のお年寄りと共に、トウシビー該当者も公民館に招いて敬老会を行い、婦人会や古典愛好会による舞踊も披露しているようです。



其ノ五 最後はクイズですカー！

これまで4回にわたって宜野湾市内に分布するカー（湧き水）について紹介してきました。今回はこれまでのおさらいとしてクイズを出します。さあ、何問わかるかな！ ★答えは8pにあるよ！

【Q1】宜野湾市にカーは、およそ何カ所ありますか？

- ① 50カ所 ② 100カ所 ③ 120カ所 ④ 180カ所 ⑤ 200カ所

【Q2】宜野湾市に分布するカーは、西側に多く分布していますが、それはなぜでしょうか？

（答えが一つとはかぎりませんよ！）

- ① そこにカーがたくさんあるから ② 西側の土地が低く、水が流れやすいから
③ 地下に流れ込んだ水の出口が西側に多くあるから ④ 人が多く住んでいるから

【Q3】右の写真のカーには、水の出口の樋口（とい）がついています。




このようなタイプのカーを何と言いますか？

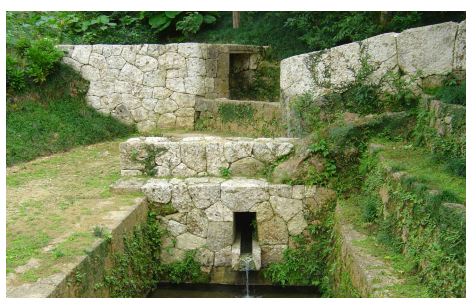
- ① チンガー ② ヒージャー ③ ヒンガー



写真は我如古 

【Q4】^{おくまうふや}奥間大親と天女との羽衣伝説とゆかりのあるカーは、どれでしょうか？

- ① 志真志のウブガー  ② 真志喜の森川  ③ 伊佐のフンシンガー 



【Q5】写真は、普天間飛行場内にある字宜野湾の「インガー」と呼ばれるカーです。この「インガー」は、ある動物が見つけたといわれています。さて、その動物とは何でしょうか？



- ① ネコ ② 鳥(ハト) ③ ネズミ ④ イヌ ⑤ ハブ



【Q6】昔は子ども達が朝早くからカーの水を汲んで、親がその水でお茶を沸かして仏壇や火の神に供えて、家族の健康を祈る若水(ワカミジ)の行事がありました。



この若水の行事は、何月に行われたでしょうか？

- ① 1月 ② 3月 ③ 5月 ④ 9月 ⑤ 12月

写真は嘉数のアガリガー ➡

【Q7】カーには生き物が住んでいる所もありますが、どんな生き物たちがいますか？

(答えが一つとはかぎりませんよ！)

- ① グッピー ② コンジテンナガエビ ③ グルクン ④ モクズガニ ⑤ タコ



【Q8】写真は、キャンプズケラン内にある喜友名のチュンナーガーです。1992(平成4)年に有形文化財の指定を受けました。カーの作りが、イナグ(女)ガーとイキガ(男)ガーに分かれ、優れた石造作りでできています。

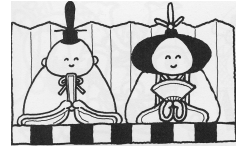


さて、チュンナーガーはどここの指定を受けたのでしょうか？

- ① 市 ② 県 ③ 国 ④ 世界遺産

さあ、みなさん、何問わかりましたか？カーは、その土地の状況を活かして造られ、古くから人びとの生活と深く結びついていました。雨が降らずに干ばつになると、生活や農作物にも影響が出てムラをあげて雨を乞う祈りも行われました。明治時代には、数ヶ月も雨が降らない大干ばつが起り、これを「ナナチチヒャーイ」と呼んでいました。それだけにカー、すなわち水は、人や生き物にとって必要不可欠なのです。

現在では水道の普及で、簡単に水が得られるようになり、カーを身近に感じることも少なくなりましたが、今でも生活用水の一部として、産業用、農業用として利用されているカーもあります。実際にカーに足を運んで水のせせらぐ音を聞き、水浴びする小鳥の姿や木々の間からカーに差し込むキラキラした光を見ると、心も和みます。これまで紹介した宜野湾市内のカーは、ほんの一部です。この機会にカーめぐりの散歩でもいかがですかカー！



めずらしかったひな人形

3月3日が近づくと、スーパーではひな人形やひなあられが並び、ひな祭りが近いことを知らせてくれます。今ではめずらしい光景ではありませんが、ひな祭りは沖縄に古くから馴染みのあった行事とはいええないようです。このコラムでは、ひな人形にまつわるエピソードについて、簡単に紹介します。

そもそも、沖縄の伝統的な「女の節供」といえば、サングワチャーでした。旧暦3月3日になると、女性は浜に下り災厄を祓い清めるハマウリ（浜下り）をし、各家庭ではヨモギ餅を作り仏壇に供え、ご馳走を家族全員で食べました。字宜野湾や我如古では、女性がスンサーミーという踊りをしています（詳しくは「がちまやあ 第4号・第9号」参照）。

そんな中、昭和に入った頃には、次第に本土のようにひな祭りが行われるようになったようです。大謝名でうかがった方からは、

「自分なんか小さい時(戦前)からあったよ。サングワチといたら、だいたいハマウリをしたが、ひな人形を飾っている家はあった。人形は今みたいのではなくて、琉球人形みたいなのを飾っていたよ。ウェーキンチュ(お金持ち)の中でも特に裕福な家でしか飾っていなかったさー。大謝名では1・2軒しかなかった。お金持ちの家は近寄りにくかったから、道沿いからサッと見て、すぐ帰ったよ。」

と、話してくださいました。



このように戦前では、ひな人形は“ウェーキンチュ”と呼ばれる一部の裕福な家庭でしか飾られることはなく、ひな祭りは一般の人たちにとってな

かなか手の届かない行事だったようです。また、当時は、現在のように“ひな人形を長い間飾っているとお嫁に行けなくなる”というようなことはなく、その日に飾ったひな人形は、その日のうちに片付けたといえます。

現在では、保育園などでもひな人形が飾られているのを見かけるようになりました。今でこそ身近なひな人形ですが、戦前ではとてもめずらしいものだったのですね。



宜野湾保育所で飾られたひな人形（1995年）

日比野さんが語る沖縄戦

去る 2006（平成 18）年 11 月 20 日に、愛知県にお住まいの日比野勝廣さんが文化課を訪れました。その際、日比野さんは、1964（昭和 39）年にご自身が撮影した嘉数高地（現・嘉数高台公園）の写真と、戦争体験の手記、それに日比野さんの証言がまとめられた『アブチラガマ 一兵士の沖縄戦』を寄贈してくださいました。

日比野さんの戦争体験

現在 84 歳になる日比野さんは、今から 63 年前に沖縄戦に兵隊として 21 歳の時に沖縄に来ました。米軍の沖縄島上陸後、嘉数一帯での戦闘が激しくなった 1945（昭和 20）年 4 月 9 日、日比野さんは嘉数高地に赴きました。沖縄戦の激戦地として知られる嘉数高地での戦闘はすさまじいものでした。その後、米軍に追いやられ、嘉数から撤退する際、浦添で負傷した日比野さんは、アブチラガマ（南城市玉城の糸数にある病院壕）で手当てを受けることになりました。しかし、米軍が南部に迫ってくると、大きな傷を負っていた日比野さんや重傷者の兵士達は、置き去りにされ、約 3 ヶ月間、壕の中で生死の境をさまようほどの過酷な日々を過ごしたのです。



戦争体験を語る日比野さん

「この嘉数に立つと、六十一年前の出来事が昨日のようによみがえってくる。あの音も。この叫びも。キャタビラの音に、身をかがめ はいつくばって戦った日々のことを。嘉数の激戦のありさまが、目の前に広がる。私は、この嘉数の高地で戦った。この高地での戦いが、八十路のわが身に鮮やかによみがえってくる。戦争というものは、勝っても負けても悲惨なものである。改めて、平和な日々が続くようにと願うばかりである。新しい、時代を担う若い皆さんへ、平和への努力を託します…。」

（手記：『沖縄戦 嘉数高地から糸数壕（アブチラガマ）へ 屍とともに生きる-』より）



1964（昭和 39）年の嘉数高地
中央の人物は、日比野さんの戦友とのこと。

日比野さんは、戦後も何十回と沖縄に通って、嘉数高台公園内の慰霊碑や玉城のアブチラガマを訪れ、亡くなった戦友のために冥福を祈り続けています。戦争が終わっても、忘れることはできないと語っていた日比野さんの言葉が心に残りました。改めて、戦争のおそろしさと、命の大切さについて、見つめ直す機会を与えてもらいました。

日比野さんは、嘉数高地の写真や戦争体験記を役立ててもらいたいとの思いで、文化課にも訪れ、嘉数高地での戦闘の状況も語って下さいました。貴重な資料の提供、心から感謝しております。日比野さんの語って下さったお話や、提供して下さった資料を市史編集の事業で、大事に活用していきたいと思っております。

～ある教員の論説をめぐって～

■ はじめに

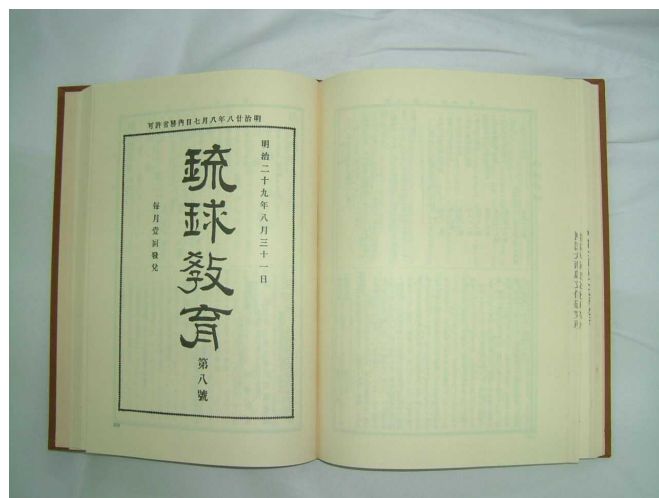
昨年12月、教育基本法が「改正」されました。「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛する」と、直接の表現は避けながらも、全体として「日本人」の育成に重点が置かれる内容となっています。このコラムでは、明治期に発表されたある教員の論説から、近代沖縄における「愛国心」について探ってみたいと思います。

■ 「護国ノ用タルベキノ義務」

明治期の宜野湾尋常小学校（現・宜野湾小学校）の学校長を務めた川上豊蔵は、日清戦争後の翌1896（明治29）年8月、『琉球教育 第八号』に寄稿した「本県児童ニ日本国民タルノ精神ヲ發揮セシムベシ」の中で、沖縄の児童に対する国民教育の徹底を主張しました。このなかで川上は、沖縄県民に日本国民としての意識が欠けているとしたうえで、

「内地各県ト相提携シ、^{およ}凡ソ有事ノ日ニ在テ、護国ノ用タルベキノ義務アルヲ解スル者、^{かい}幾^{ほと}ンド希レナリ」

と、戦争が起きても「護国ノ用タルベキノ義務」を理解できる県民がほとんどいないと論じていました。



『琉球教育 第八号』（復刊）

沖縄国際大学 南島文化研究所蔵

■ 「沖繩世」への願い

この論説が発表された日清戦争後の社会状況について、同じ年に宜野湾尋常小学校に入学してきた新城加那は、「頑固党（注1）の成員は髪を結い、旧グングワチ（注2）には普天間宮に集まり、中国が日本に戦争をおこし、再びもとの沖繩世にしてくれるよう願をかけていた」（『宜野湾小学校創立百周年記念誌』208項）と、回想しています。新城の回想にみられるように、日清戦争後にあっても頑固党が依然として「沖繩世」への願いを持ち続け、清国へ期待を抱いていたことに示されるように、帰属意識は混沌とした状況にありました。

■ “排除” と “包摂”

日清戦争の直後であって、沖縄の人びとを「固ヨリ日本国民」として取り込もうとした川上は、沖縄の人びとに「明清冊封ノ余毒」を見出し、その「余毒」を断ち切るべく、「異風異俗」の矯正を呼びかけました。そこで主張されたものこそ、他府県の弟・妹として「日本国民ノ精神」の周縁に“排除”しながら、「忠君愛国」の至誠においてこそ兄弟姉妹の区別なく他府県と悲喜を共にできるとする“包摂”により、沖縄の人びとを「護国ノ用タルベキノ義務」へと誘導するという、きわめて国防上の理由に貫かれた、装置としての国民教育でした。

■ おわりに

1898（明治31）年には、沖縄県にも“他府県同様に”徴兵令が実施されました。県内各地で多くの徴兵忌避者を出しましたが、1904（明治37）年の日露戦争以降、徴兵された沖縄県民の中から、「帝国軍人」として多くの戦死者を出しました。そして、戦死者を弔う儀式などを通して、“皇民化”に向かってより強く引きつけられていったのでした。

川上の論説にみられるような、“排除”と“包摂”によって、「愛国心」―「護国の義務」―へと回収していく企てから、現在、私たちはどの地点にいるのでしょうか。

注1 頑固党：琉球処分をめぐる政治過程において、琉球王府の存続を主張した土族一派。清国へ救済を求め、清に脱する者も少なからずいた。

注2 グングワチ：邪気を祓^{はら}う行事、旧暦5月に行う。

地域史協議会 in 津堅島!!

昨年11月21日(火)から22日(水)にかけて、うるま市勝連の津堅島で沖縄県地域史協議会第二回研修会が開かれました。研修会は、他市町村史のスタッフと交流できるだけでなく、巡見を通して、地域の歴史や文化を肌で感じ取ることができる絶好の機会でもあります。初日の巡見では多くの史跡を見学しました。

14～15世紀の輸入陶磁器が採集され、拝^{あが}として崇められているクボウグスクをはじめ、戦争遺跡群に指定された日本軍の陣地壕や、水不足の頃に鳩がみつけたといわれるホートウガー、1896(明治29)年に設置され、沖縄戦で破壊された灯台の跡など、“小さな島”の豊かな歴史を感じました。



👉 ホートウガー

なかでも、クボウグスク周辺の陣地壕が特に印象に残りました。米軍の中城湾進攻に備え、島民総動員で作られた陣地壕ですが、実際に見学した陣地壕は小さく、^{かが}屈まないと中に入れないほどでした。壕の中に大人5・6名が入ると、身動きが取れなくなるほど狭くて、薄暗く、所々に壁面が崩れかけている壕の中からは、沖縄戦当時の緊迫した空気が伝わってくるようでした。

今回の研修では、巡見中に、途中で道が分からなくなり、畑仕事をしている地元の方に尋ねることもありました。行き先を笑顔で親切に教えて下さり、津堅島の人びとの優しさに触れた一日でもありました。



👉 陣地壕の入口

美ら旗おどる、大山の旗頭

昨年、10月29日(日)に第3回RYUKYU 民族の祭典で「第6回全島旗頭フェスティバル」が那覇市の奥武山運動公園多目的広場で行われました。那覇市や糸満市から数カ所の地域をはじめ、遠くは石垣市と真栄里と大浜から、計21団体が参加しました。宜野湾市からは、大山の旗頭が参加しました。

風が吹く中、大山のニーセーター(青年達)は、前村渠と後村渠の2旗の旗頭を勇壮に躍らせていました。大抵の地域が旗頭を両手で持ちますが、大山は片手で頭上高く持ち上げることに特徴があります。これには旗頭の持ち手と、旗竿に括られた縄を引く者のバランスが大切です。

この年の綱引きから新調した旗頭を持つ大山のニーセーターの益々の活躍を期待します。



美ら旗を躍らせる大山の旗頭

文化課のホームページがリニューアル・オープン♪

文化課・市史編集系のページをリニューアルしました！これまでの「がちまやあ」を見ることができるよう、「市報ぎのわん」に連載しているコラム「茶ぐわーゆんたく」、宜野湾市の歴史や市史編集係で発刊した刊行物の一覧も確認できます。

みなさん、どうぞご覧になって下さいね♪

23p「カーi」のそそ：0103、02203、0302、0402、0504、0611、0712②④、080